

新しい年を迎えて 養鶏試験場からのご挨拶

出口孝吉

農村における成長産業として、農業経営改善のない手として、畜産が今日ほどその重要性を認識されまた期待を寄せられていることは未だかつてない事と存じます。今まで自前産業として顧みられなかった養鶏も、昭和35年は養鶏振興法の成立、水産資本の進出、集団養鶏、企業養鶏の台頭などブームをまきおこしており、指導者層もその変転のはげしさにいささか途迷どいしている現状です。この新しい波に対して試験場としては研究機関という地味な性格ながら、種鶏改良や試験研究を通じて新しい方向をとって、養鶏の振興と経営の合理化に寄与したいと存じます。

新しい年を迎えてこの機会に試験場の事業の進め方について申し上げますと、第1に本年から経済検定を実施したいと考えております。従来の産卵能力検定が本県の種鶏改良の推進に大きな役割を果たしたことは申すまでもありませんが、養鶏農家の経営安定の基礎になる初生雛の資質改良という点については、不徹底の憾みがあります。単に産卵能力だけでなく、初生雛をランダムに抜き取って育成し、雛、成鶏を通じての生存率、飼料効率、収支など経済性の検定を行なってこそ初めて種鶏改良の実績が上り、県内産の雛の優秀性を証明できるわけです。

健全な養鶏の発達のためには技術並びに経営改善の普及が急務ですが、末端の養鶏指導に当たる技術員は著しく不足している現状です。試験場では修業年限1カ年の講習生の養成を行なっておりますがこれのみでは人員に限度があり目下の要望に応じ得ませんので、育雛とか成鶏管理とか部門別に計画的に短期講習を実施致します。そのために本年は短期講習用宿舎の建設を是非とも実現させたいと考えております。それと同時に新しい養鶏のための農家向パンフレットの作製配布を計画しております。

ブロイラーの一般消費の普及に伴ってブロイラー用素雛の需要が増大し、肉用鶏に対する関心が高ま



って来ております。試験場でも昨年からの試験的に飼育していますが、本年は本格的に育種を進めてゆきます。

本年の試験研究としては、県下養鶏家の経営の合理化をはかることを主眼として、管理についての試験と、経営に関する調査を実施したいと考えます。即ち管理についてはブロイラーの管理方式が確立されておられませんし、産卵鶏では新しい単飼ケージやペンケージの様式に対しどのような鶏舎を設計すべきか、その防寒、防暑の方法はどうか、また労力の節減方法などについては従来あまり研究されておられませんのでこれらの点の究明をはかってゆきます。経営については養鶏家の経営実績を調査して立地条件や規模に合致した経営方式を樹立する資料としたいと存じます。この点につきましてもは各種研究機関

岡山畜産便り 1961.01

や農林事務所、改良普及所の御協力をお願い致します。

最後に最近の都市周辺の企業養鶏の発達に対して農村養鶏の将来を悲観する向もあるようですが、農村養鶏はそれなりのゆき方があり存在価値があると思います。ただ今までの考え方や経営方式を改善することは絶体必要で、発展段階にある養鶏においてもある程度の起伏が予想されるので、経営の集団化、合理化をはかり生産コストを低減することが大切です。試験場でも皆様の相談相手として積極的に事業を進めてゆきたいと思っておりますので、御協力御支援をお願いしますと共に、遠慮のない御意見を寄せられるよう望んでおります。

36年1月～3月の 鶏卵市況見とおし

(農業情報No.83)

最近鶏の飼養羽数が急速に増えていますが、農林省は昭和36年1～3月までの鶏卵市況の見とおしとして、去る12月2日、次のとおり発表しました。

これによると、1～3月の鶏卵の農村価格は、ひきつづき産卵量が増加する見込みなので、35年同期よりかなり安いと予想されています。

鶏卵市場の動向と今後の見とおし

1、鶏卵の生産見込み

35年1～3月の産卵量は、前年同期比8%増の22.3億個であったが、2月現在の成鶏めす羽数(対前年7.5%増)34年秋びな発生羽数(同年50%増)35年春びな発生羽数(同年33%増)などから推定すると、35年の鶏卵の生産量は前年の81億個を10%余上廻る90億個前後に達するものとみられる。

2、鶏卵の消費

- ①都市家庭用(35年1月～7月)は前年同期比10%増
- ②業務用も経済の好況でかなり増加
- ③加工用はマヨネーズ生産が、35年1月～9月間だけで、34年の年間を上回るほどで大巾な増し、
- ④輸出も、香港向けがひきつづき好調で、1月～9月間は前年同期より17%増と全体としてかなり増

加している。

3、35年市況概況

鶏卵の生産増加にもかかわらず、35年前半(1～5月)の農村価格が、前年同期より8%程度高かったのは、時期的に加工用の買付、輸出好調、豚肉不足ともからんだ一般消費の増加等が重なった需要の堅調のためとみられる。

後半に入って生産の増加率、高まってきたのに対し、一般消費はひきつづきかなり増加したものの、加工、輸出が時期的に減少したため、需要の伸びが供給の増加に及ばず、農村価格は、前年同期をやや下回るようになった。

しかし年間を通じてみると、鶏卵市場は比較的安定した動きをみせているといえよう。

4、36年1～3月の鶏卵価格の見とおし

- ①36年1～3月間の鶏卵の生産は35年春びなの発生状況からみると、前年同期にくらべて大巾に増加するみこみである。
- ②一方需要は家庭、業務用ともひきつづき増加し、加工用も大巾に増加するが、輸出は前年同期程度とみこまれ、全体としては生産の増加を消化するほど伸びるかどうかが問題であろう。
- ③36年1～3月の鶏卵の農村価格は、近年では、32年について高かった35年1月～3月の188円(全国平均1Kg当り)にくらべかなり安くなるのではないかとみられる。

月日	場	所	講座	内容	講師
一月二十六日(木)	天満屋	岡山県立石井小中学校	和牛改良及び上手な肥育について		京都大学教授 坂次
二十七(金)	岡山県立石井小中学校	カバヤ正門東入	酪農	これからの酪農は	農林省農業技術研究所 宮坂 悟朗
二十八日(土)			養鶏	新しい養鶏経営	神奈川県中央養鶏農協 組合長 坂 茂一
二十九日(日)			養豚	豚の飼育管理と経営	農林省九州農業試験場 畜産研究室長 栗原 武

お知らせ

畜産冬季大学開校

(注)時間は午前10時から午後5時まで
受講希望の方は各農林事務所・農業改良普及所へ1月10日までに申込のこと。(テキスト代1講座100円)